

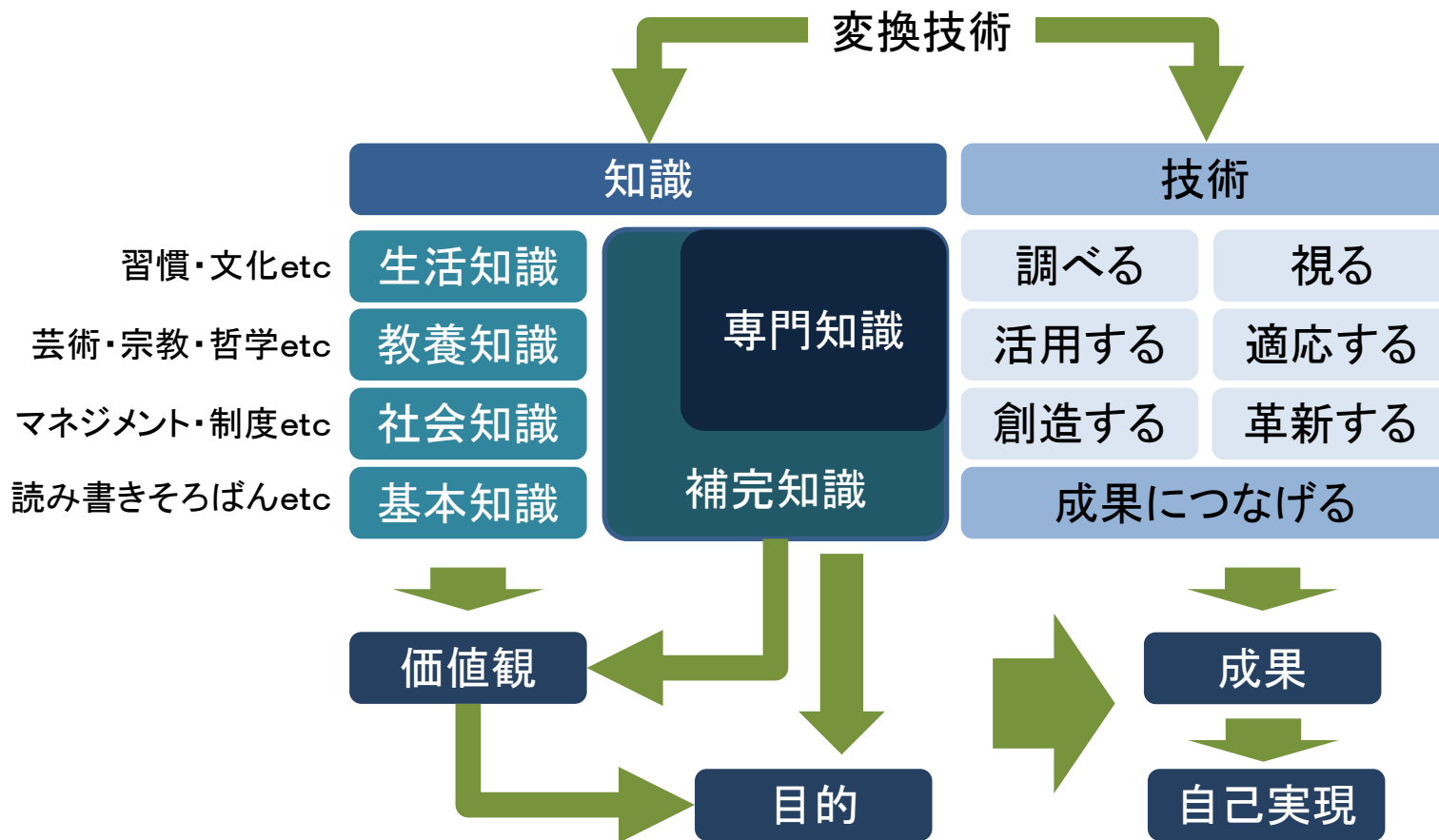
人文組織工学 A基礎理論

# 知識について



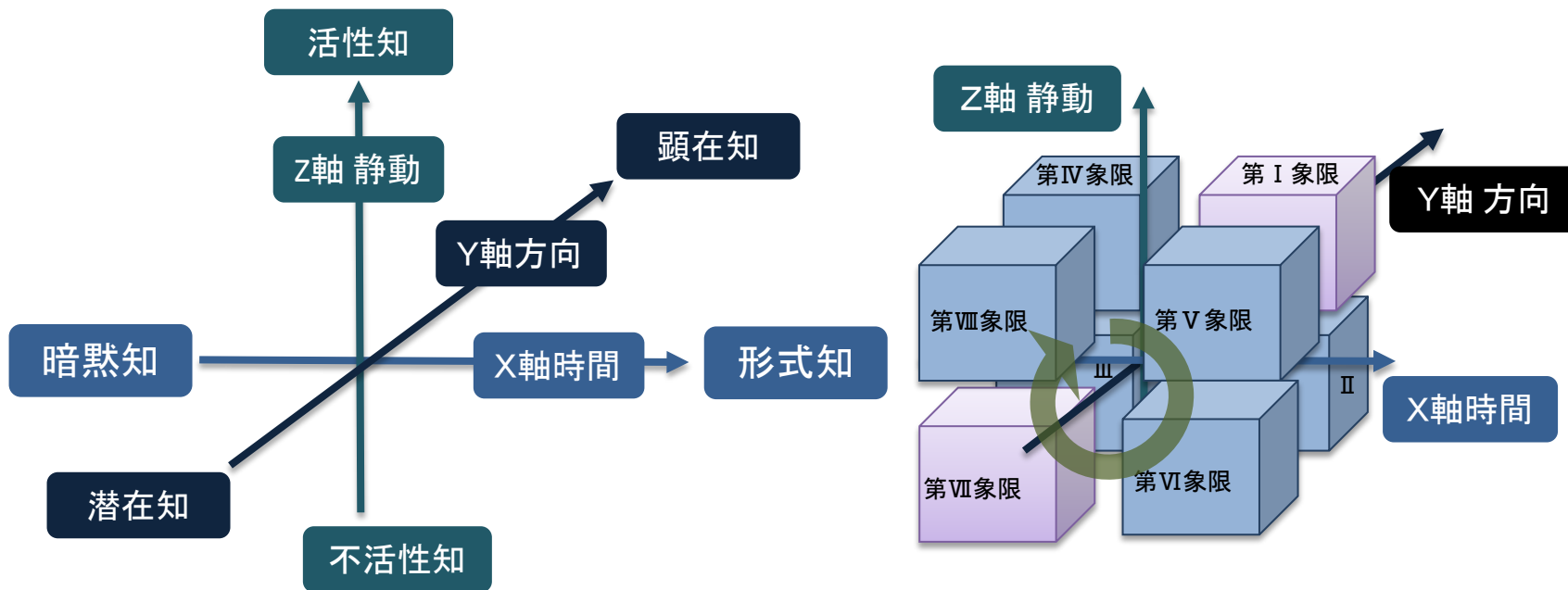
# 活動する知識の種類

学ぶには体系が必要であるが、いつまでも体系で学ぶものではない。  
或る時期をすぎたら、自らの目的にしたがって、自らの体系を作りだしていく。その体系は、仕事の体系と重なり、独自の知識構造をもつようになる。



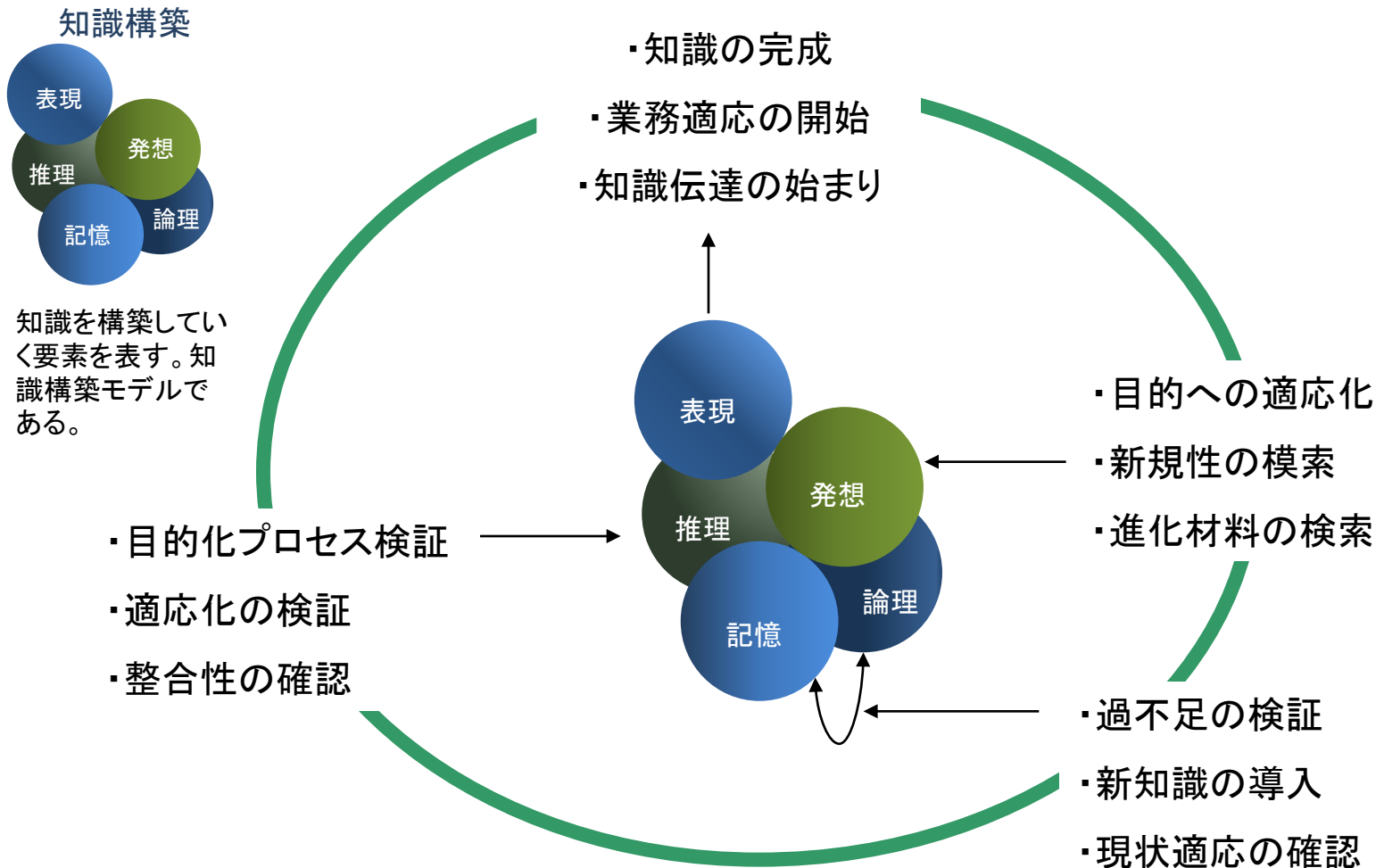
# 有効知識への変換

知識伝達を試みるとき、知識は第Ⅰ象限にある。第Ⅱ～Ⅷ象限にある知識は、常に第Ⅰ象限へ持っていかなければならない。



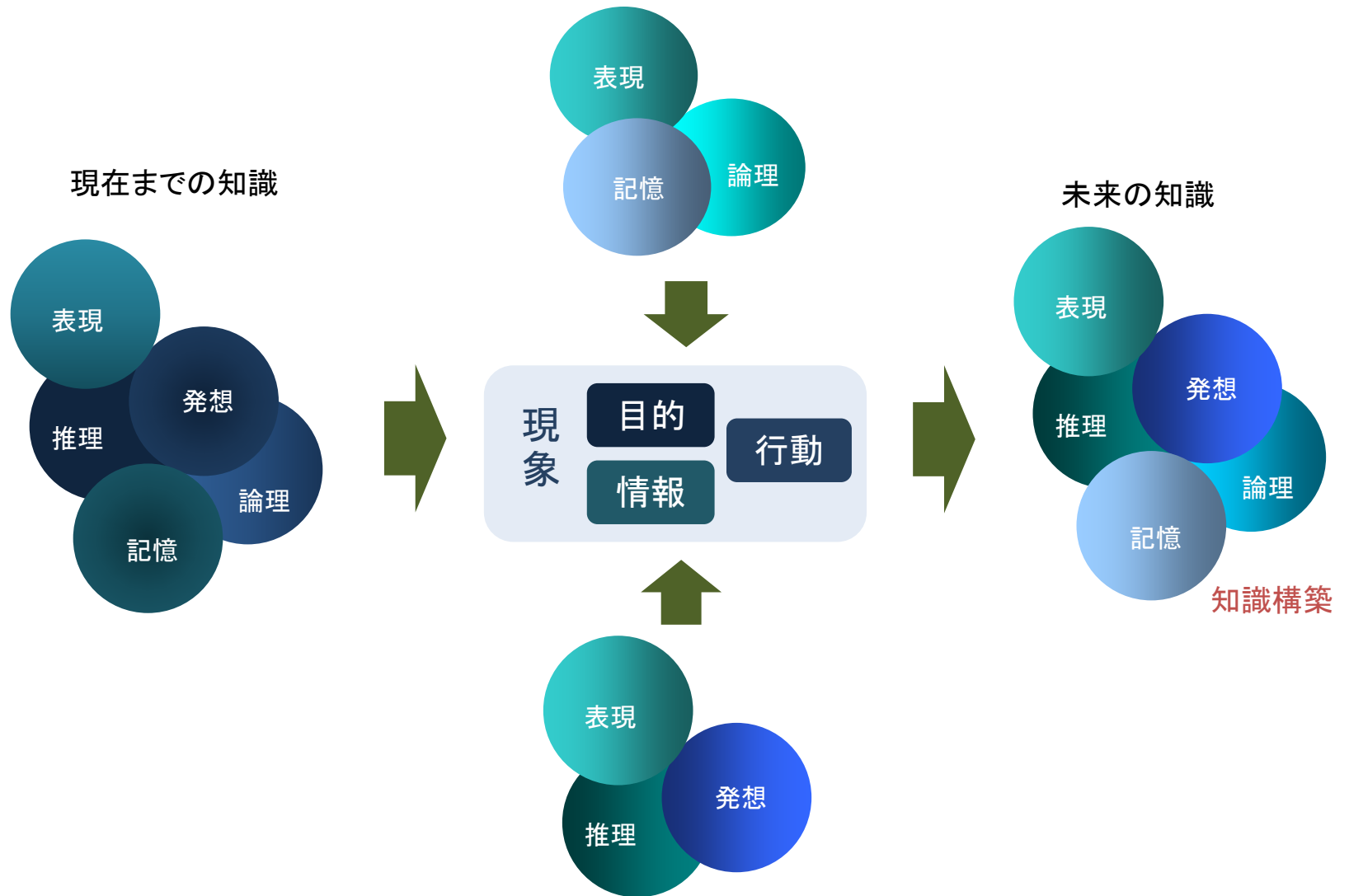
知識は静的とする。活用意識、伝達意識がなければ、知識として存在するのみである。知識は体系化されている。体系化されたとき途切れはなく、他の知識と繋がる部分を持つ。分類された知識は便宜上で、知識活用では、便宜上の知識分類は存在しない。活性度の高い知識は他分野知識との結合ができやすい状態を示すとした。

# 1つの知識の構成



知識を作り、学び、教える形を刺激するサイクルである。

# 知識を進化させる

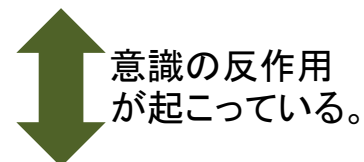


# 価値と知識の作用・反作用

物の生産は同じ物を多量に作りだすことを基準にした。  
生産性は、多量に作る場合もコスト削減、資源削減、時間削減が中心に置かれている。

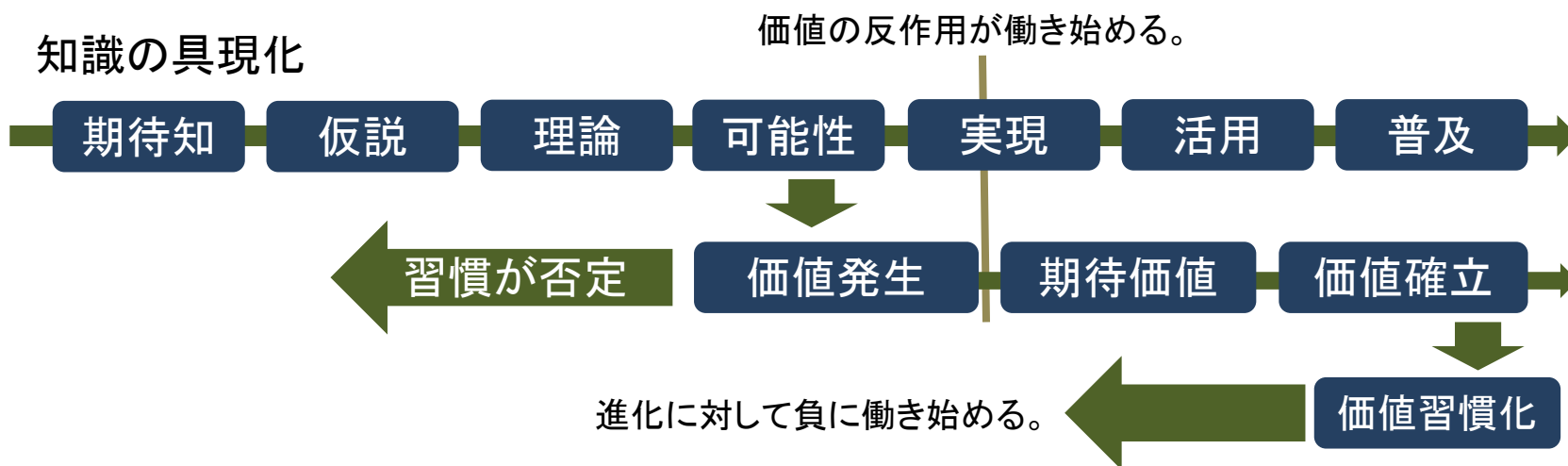
だからその解は、肉体労働をなくす方向へと進む。

新しい物を創る場合は、生産ではなく創造となる。  
知識生産は、知識の生産と知識が生み出す視点とがある。



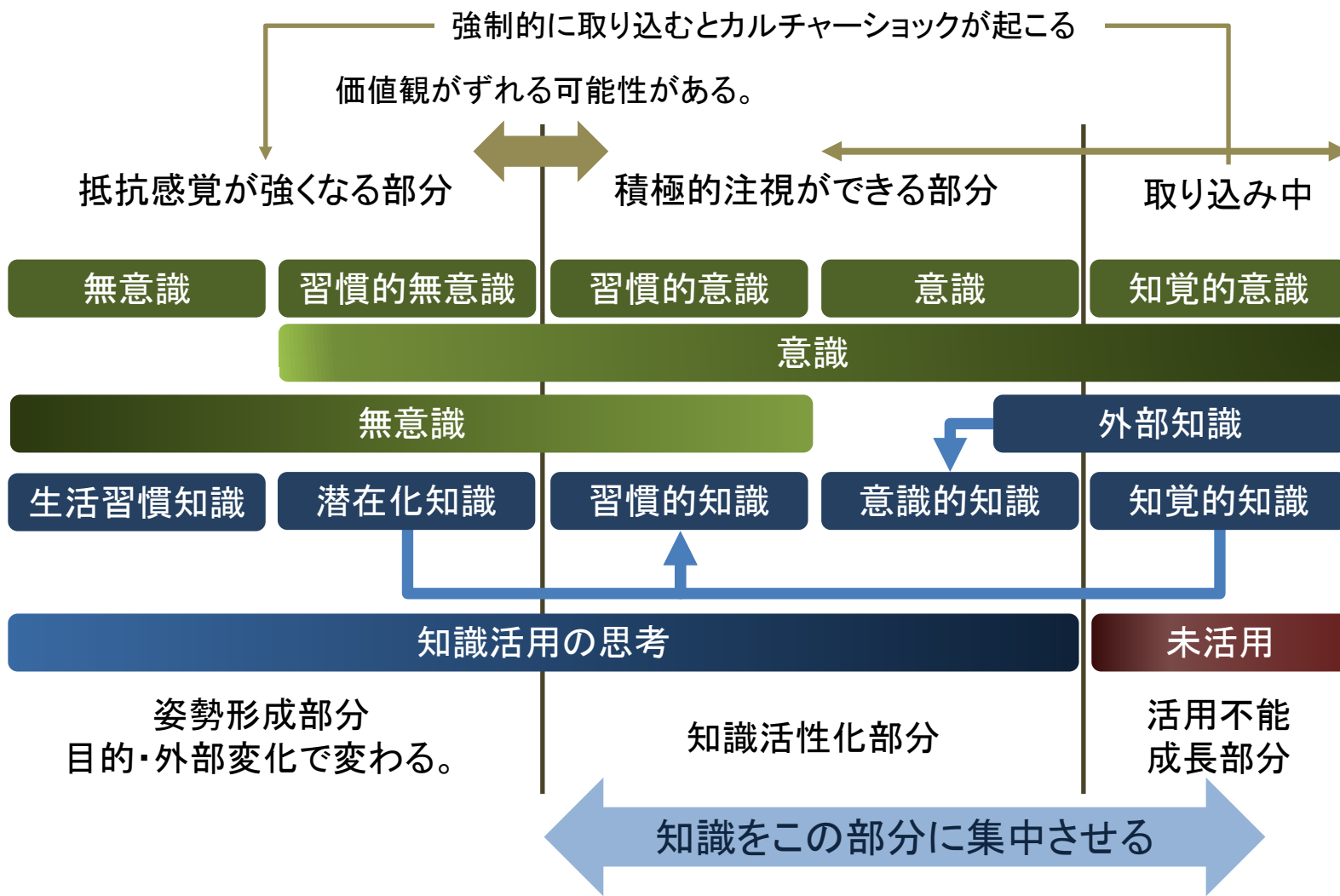
知識の生産性は機会を発見し、機会を活用することである。

永く続いているから正しいとする価値がある。進化への抵抗価値である。



# 意識レベルと知識活用

意識・知識には、維持する部分と発展・進化する部分がある。

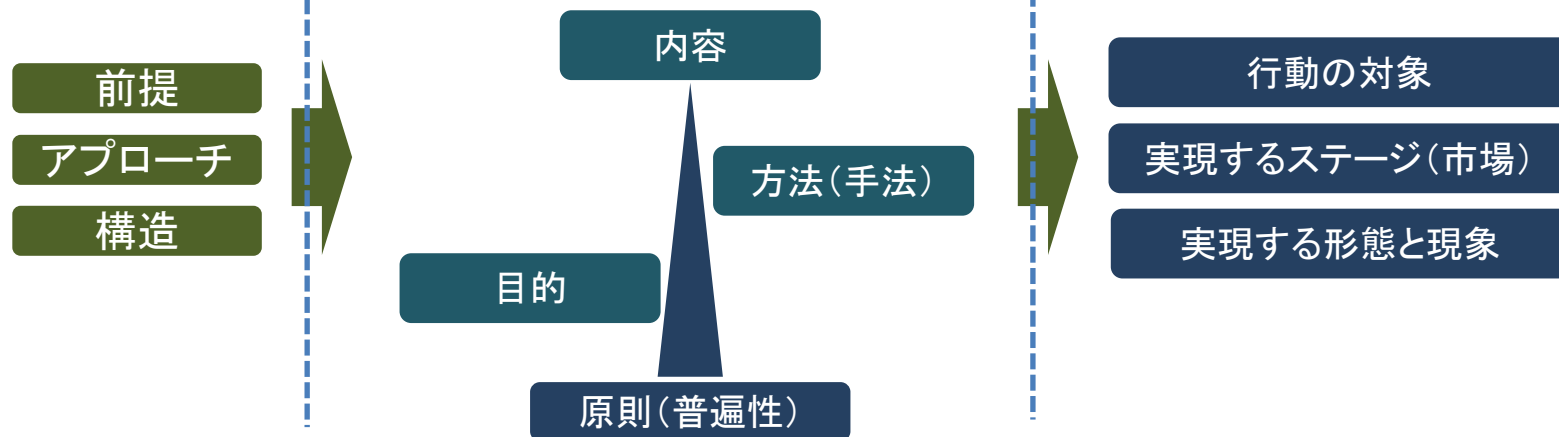


# 自らの知識・技術を体系化する

知識を機能化する

知識の対象(テーマ)

《体系の基本形》



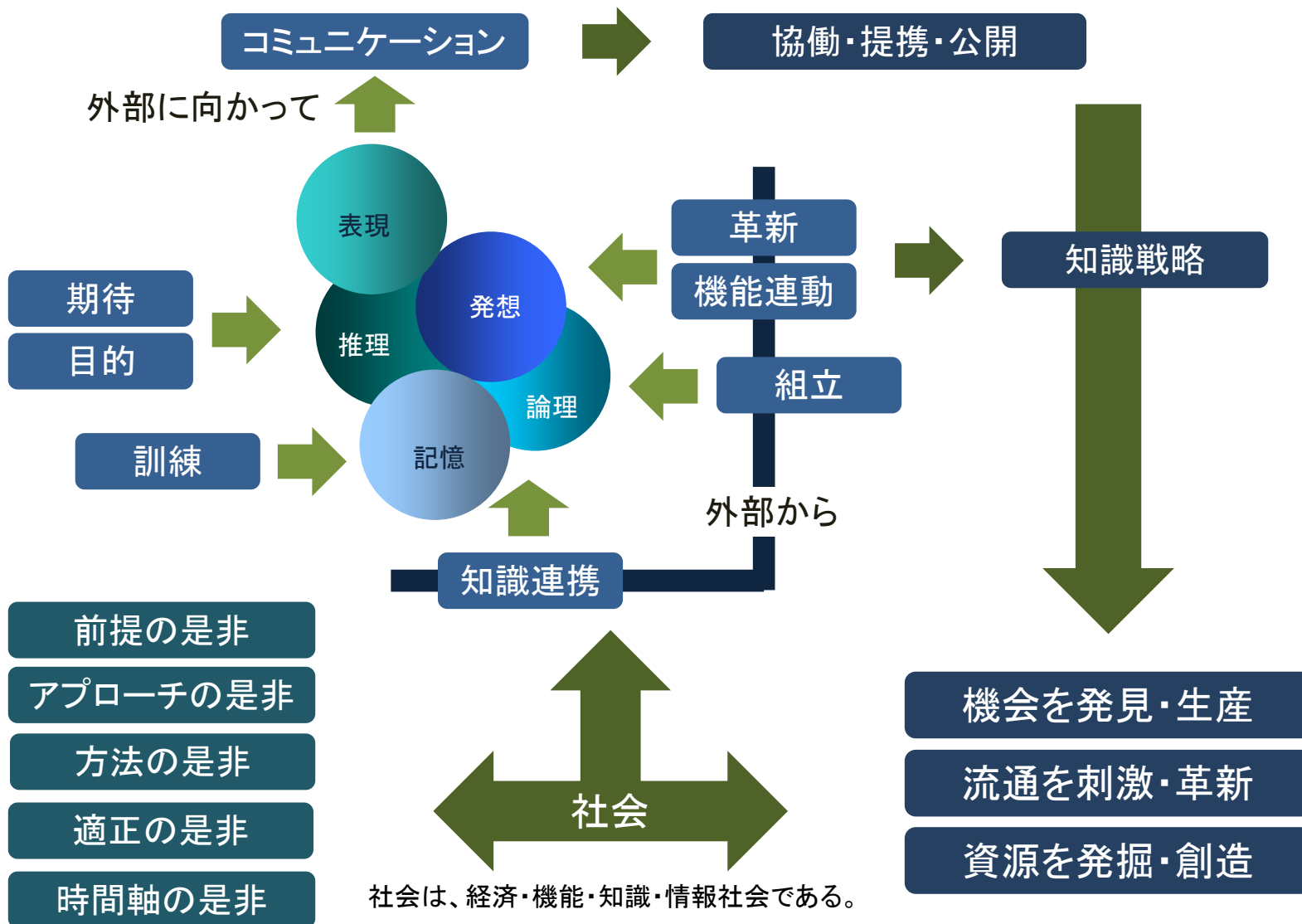
目的の設定によって、内容と方法が変わる。  
内容が変われば、目的の成果・精度が変わる。  
方法が変われば、スピード・成果の現れ方が変わる。

体系化する知識の前に、自らの知識を構成する核が必要である。それは知識であるが、上にあげた項目である。

知識を活かし、機能化するには時間が必要である。時間を考えない知識はない。適応する条件が必要になる。

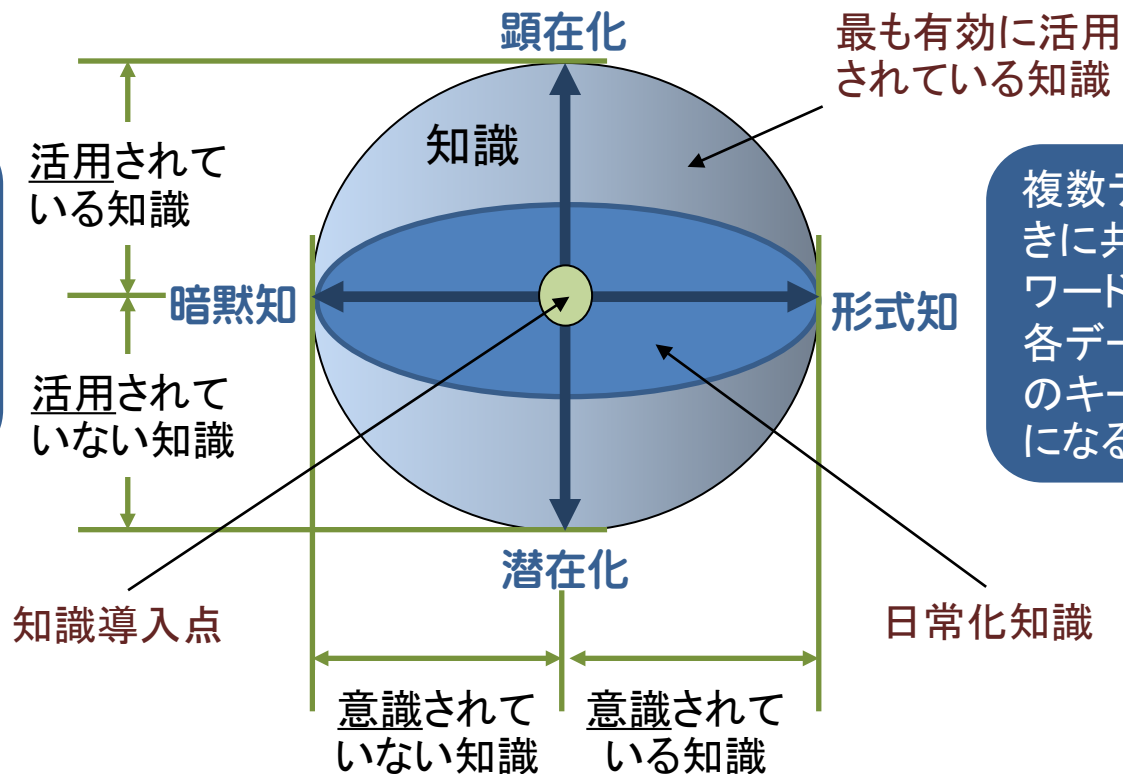


# 知識生産性



# 知識と文章分析値

命題と繋がる単語群で表される。



複数データのと  
きに共通キー  
ワード群に含ま  
れ、各データ単  
位でのキーワー  
ド群にならない。

複数データのと  
きに共通キー  
ワード群になり、  
各データ単位で  
のキーワード群  
になる。

→は、単語単  
位での分析値  
(単語重量値)  
で表される。

キーワードにならない  
単語群で構成される

キーワードになりやす  
い単語群で構成される